

乱用のための有機溶剤の入手可能性についての回答の分布を表60に示した。

「シンナー遊び」非経験者群では、「ほとんど不可能」「絶対不可能」を選んだ者の合計が男性で73%、女性で75%と半数を超えていたが、「シンナー遊び」経験者群では、「簡単に手に入る」「少々苦勞するが、なんとか手に入る」を選んだの者の合計は、男性で55%、女性で61%にものぼった。

全体では「シンナー遊び」非経験者群では、「ほとんど不可能」「絶対不可能」を選んだ者の合計が74%であるのに対して、「シンナー遊び」経験者群では、「簡単に手に入る」「少々苦勞するが、なんとか手に入る」を選んだの者の合計が、逆に58%にものぼっていた。両群間には明らかな違い ($p < 0.01$) が認められた。

表57 覚せい剤の乱用経験（生涯経験率）

		1年		2年		3年		全体	
男性	覚せい剤経験なし	10885	(98.2)	10609	(98.4)	11100	(98.4)	32594	(98.3)
	覚せい剤経験あり	42	(.4)	60	(.6)	73	(.6)	175	(.5)
	無回答	154	(1.4)	114	(1.1)	113	(1.0)	381	(1.1)
	合計	11081	(100)	10783	(100)	11286	(100)	33150	(100)
$(\chi^2 = 7.764, df = 2, p = .021)$									
女性	覚せい剤経験なし	10418	(98.8)	10557	(98.7)	10964	(98.8)	31939	(98.7)
	覚せい剤経験あり	30	(.3)	45	(.4)	49	(.4)	124	(.4)
	無回答	96	(.9)	96	(.9)	89	(.8)	281	(.9)
	合計	10544	(100)	10698	(100)	11102	(100)	32344	(100)
$(\chi^2 = 4.050, df = 2, p = .132)$									
全体	覚せい剤経験なし	21320	(98.5)	21184	(98.5)	22078	(98.5)	64582	(98.5)
	覚せい剤経験あり	72	(.3)	105	(.5)	127	(.6)	304	(.5)
	無回答	253	(1.2)	210	(1.0)	203	(.9)	666	(1.0)
	合計	21645	(100)	21499	(100)	22408	(100)	65552	(100)
$(\chi^2 = 13.358, df = 2, p = .001)$									

表58 「シンナー遊び」経験と覚せい剤乱用経験の関係

		生涯シンナー経験			全体				
		経験なし	経験あり	無回答					
男性	覚せい剤経験なし	32074	(98.8)	307	(73.1)	213	(77.2)	32594	(98.3)
	覚せい剤経験あり	76	(.2)	95	(22.6)	4	(1.4)	175	(.5)
	無回答	304	(.9)	18	(4.3)	59	(21.4)	381	(1.1)
	合計	32454	(100)	420	(100)	276	(100)	33150	(100)
$(\chi^2 = 4158.734, df = 1, p = .000)$									
女性	覚せい剤経験なし	31588	(99.1)	230	(72.6)	121	(73.3)	31939	(98.7)
	覚せい剤経験あり	40	(.1)	82	(25.9)	2	(1.2)	124	(.4)
	無回答	234	(.7)	5	(1.6)	42	(25.5)	281	(.9)
	合計	31862	(100)	317	(100)	165	(100)	32344	(100)
$(\chi^2 = 5554.657, df = 1, p = .000)$									
全体	覚せい剤経験なし	63708	(99.0)	540	(72.6)	334	(75.6)	64582	(98.5)
	覚せい剤経験あり	117	(.2)	180	(24.2)	7	(1.6)	304	(.5)
	無回答	541	(.8)	24	(3.2)	101	(22.9)	666	(1.0)
	合計	64366	(100)	744	(100)	442	(100)	65552	(100)
$(\chi^2 = 9573.207, df = 1, p = .000)$									

表59 覚せい剤を使うと精神病状態になりやすく、またフラッシュバックがあることを知っていますか？

		生涯シンナー経験						全体	
		経験なし		経験あり		無回答			
男性	知っている	20296	(62.5)	270	(64.3)	137	(49.6)	20703	(62.5)
	知らない	11738	(36.2)	130	(31.0)	109	(39.5)	11977	(36.1)
	無回答	420	(1.3)	20	(4.8)	30	(10.9)	470	(1.4)
	合計	32454	(100)	420	(100)	276	(100)	33150	(100)
$(\chi^2 = 2.922, df = 1, p = .087)$									
女性	知っている	21340	(67.0)	215	(67.8)	79	(47.9)	21634	(66.9)
	知らない	10249	(32.2)	94	(29.7)	68	(41.2)	10411	(32.2)
	無回答	273	(.9)	8	(2.5)	18	(10.9)	299	(.9)
	合計	31862	(100)	317	(100)	165	(100)	32344	(100)
$(\chi^2 = .572, df = 1, p = .449)$									
全体	知っている	41662	(64.7)	492	(66.1)	216	(48.9)	42370	(64.6)
	知らない	22005	(34.2)	224	(30.1)	178	(40.3)	22407	(34.2)
	無回答	699	(1.1)	28	(3.8)	48	(10.9)	775	(1.2)
	合計	64366	(100)	744	(100)	442	(100)	65552	(100)
$(\chi^2 = 3.365, df = 1, p = .067)$									

表60 有機溶剤の入手可能性

		生涯シンナー経験						全体	
		経験なし		経験あり		無回答			
男性	絶対不可能	18976	(58.5)	126	(30.0)	141	(51.1)	19243	(58.0)
	ほとんど不可能	4713	(14.5)	53	(12.6)	34	(12.3)	4800	(14.5)
	少々苦勞するが手に入る	3879	(12.0)	78	(18.6)	29	(10.5)	3986	(12.0)
	簡単に手に入る	4317	(13.3)	151	(36.0)	39	(14.1)	4507	(13.6)
	無回答	569	(1.8)	12	(2.9)	33	(12.0)	614	(1.9)
	合計	32454	(100)	420	(100)	276	(100)	33150	(100)
$(\chi^2 = 232.984, df = 3, p = .000)$									
女性	絶対不可能	19276	(60.5)	86	(27.1)	72	(43.6)	19434	(60.1)
	ほとんど不可能	4715	(14.8)	34	(10.7)	28	(17.0)	4777	(14.8)
	少々苦勞するが手に入る	4063	(12.8)	69	(21.8)	24	(14.5)	4156	(12.8)
	簡単に手に入る	3192	(10.0)	125	(39.4)	19	(11.5)	3336	(10.3)
	無回答	616	(1.9)	3	(.9)	22	(13.3)	641	(2.0)
	合計	31862	(100)	317	(100)	165	(100)	32344	(100)
$(\chi^2 = 341.525, df = 3, p = .000)$									
全体	絶対不可能	38278	(59.5)	212	(28.5)	213	(48.2)	38703	(59.0)
	ほとんど不可能	9431	(14.7)	87	(11.7)	62	(14.0)	9580	(14.6)
	少々苦勞するが手に入る	7947	(12.3)	149	(20.0)	53	(12.0)	8149	(12.4)
	簡単に手に入る	7521	(11.7)	281	(37.8)	58	(13.1)	7860	(12.0)
	無回答	1189	(1.8)	15	(2.0)	56	(12.7)	1260	(1.9)
	合計	64366	(100)	744	(100)	442	(100)	65552	(100)
$(\chi^2 = 577.247, df = 3, p = .000)$									

(2) 大麻の入手可能性について

大麻の入手可能性についての回答の分布を表61に示した。

「簡単に手に入る」「少々苦勞するが、なんとか手に入る」を選んだの者の合計は、「シンナー遊び」未経験者群では、男子で18%、女子で17%で、経験者群では、男子で46%、女子で52%であり、両群には有意差 ($p < 0.01$) が認められ、「シンナー遊び」経験者群での大麻入手可能性の高さが強く示唆された。

また、1998年調査では、入手可能性は男性の方が高かったが、2000年調査以降は%上は女性の方が高くなっていた。

(3) 覚せい剤の入手可能性について

覚せい剤の入手可能性についての回答の分布を表62に示した。

「簡単に手に入る」「少々苦勞するが、なんとか手に入る」を選んだの者の合計は、「シンナー

遊び」未経験者群では、男子で17%、女子で18%で、経験者群では、男性で45%、女性で54%であり、両群には有意差 ($p < 0.01$) が認められた。

この結果は、大麻の入手可能性の値とほぼ同じであり、同時に、「シンナー遊び」経験者群での覚せい剤入手可能性の高さが強く示唆された。

また、1998年調査では、入手可能性は男女で拮抗していたが、2000年調査以降は%上は女性の方が高くなっていた。

以上、3つの違法性薬物の入手可能性については、考察で論じたい。

D. 考察

1. 本調査研究の位置づけ

わが国の中学生における「シンナー遊び」の広がりについての調査研究で、地域特性を考慮して行われた大規模なものとしては、当分担研究者の知る限り、1990年から原則2年に1回、当分担研究者らによって実施されてきた千葉県公立中学校

表61 大麻の入手可能性

		生涯シンナー経験			全体	
		経験なし	経験あり	無回答		
男性	絶対不可能	21271 (65.5)	152 (36.2)	153 (55.4)	21576 (65.1)	
	ほとんど不可能	4905 (15.1)	65 (15.5)	37 (13.4)	5007 (15.1)	
	少々苦勞するが手に入る	3634 (11.2)	86 (20.5)	29 (10.5)	3749 (11.3)	
	簡単に手に入る	2122 (6.5)	106 (25.2)	25 (9.1)	2253 (6.8)	
	無回答	522 (1.6)	11 (2.6)	32 (11.6)	565 (1.7)	
	合計	32454 (100)	420 (100)	276 (100)	33150 (100)	
$(\chi^2 = 303.320, df = 3, p = .000)$						
女性	絶対不可能	21014 (66.0)	103 (32.5)	82 (49.7)	21199 (65.5)	
	ほとんど不可能	4717 (14.8)	45 (14.2)	25 (15.2)	4787 (14.8)	
	少々苦勞するが手に入る	3749 (11.8)	69 (21.8)	23 (13.9)	3841 (11.9)	
	簡単に手に入る	1825 (5.7)	96 (30.3)	12 (7.3)	1933 (6.0)	
	無回答	557 (1.7)	4 (1.3)	23 (13.9)	584 (1.8)	
	合計	31862 (100)	317 (100)	165 (100)	32344 (100)	
$(\chi^2 = 395.208, df = 3, p = .000)$						
全体	絶対不可能	42311 (65.7)	255 (34.3)	235 (53.2)	42801 (65.3)	
	ほとんど不可能	9628 (15.0)	111 (14.9)	62 (14.0)	9801 (15.0)	
	少々苦勞するが手に入る	7389 (11.5)	156 (21.0)	52 (11.8)	7597 (11.6)	
	簡単に手に入る	3955 (6.1)	207 (27.8)	37 (8.4)	4199 (6.4)	
	無回答	1083 (1.7)	15 (2.0)	56 (12.7)	1154 (1.8)	
	合計	64366 (100)	744 (100)	442 (100)	65552 (100)	
$(\chi^2 = 711.557, df = 3, p = .000)$						

表62 覚せい剤の入手可能性

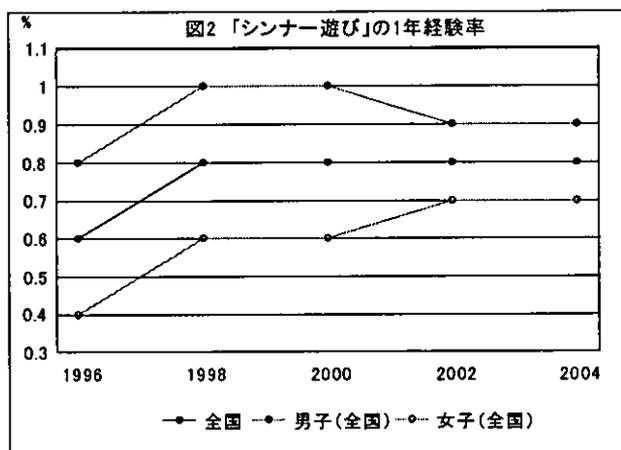
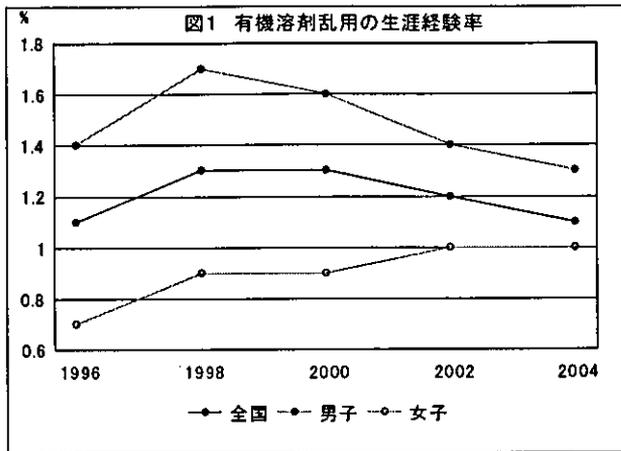
		生涯シンナー経験						全体	
		経験なし		経験あり		無回答			
男性	絶対不可能	21486	(66.2)	147	(35.0)	160	(58.0)	21793	(65.7)
	ほとんど不可能	4771	(14.7)	72	(17.1)	33	(12.0)	4876	(14.7)
	少々苦勞するが手に入る	3505	(10.8)	83	(19.8)	33	(12.0)	3621	(10.9)
	簡単に手に入る	2196	(6.8)	108	(25.7)	19	(6.9)	2323	(7.0)
	無回答	496	(1.5)	10	(2.4)	31	(11.2)	537	(1.6)
	合計	32454	(100)	420	(100)	276	(100)	33150	(100)
$(\chi^2 = 308.515, df = 3, p = .000)$									
女性	絶対不可能	20934	(65.7)	101	(31.9)	83	(50.3)	21118	(65.3)
	ほとんど不可能	4566	(14.3)	41	(12.9)	23	(13.9)	4630	(14.3)
	少々苦勞するが手に入る	3752	(11.8)	74	(23.3)	25	(15.2)	3851	(11.9)
	簡単に手に入る	2072	(6.5)	97	(30.6)	12	(7.3)	2181	(6.7)
	無回答	538	(1.7)	4	(1.3)	22	(13.3)	564	(1.7)
	合計	31862	(100)	317	(100)	165	(100)	32344	(100)
$(\chi^2 = 359.588, df = 3, p = .000)$									
全体	絶対不可能	42444	(65.9)	248	(33.3)	243	(55.0)	42935	(65.5)
	ほとんど不可能	9344	(14.5)	114	(15.3)	56	(12.7)	9514	(14.5)
	少々苦勞するが手に入る	7263	(11.3)	158	(21.2)	58	(13.1)	7479	(11.4)
	簡単に手に入る	4277	(6.6)	210	(28.2)	31	(7.0)	4518	(6.9)
	無回答	1038	(1.6)	14	(1.9)	54	(12.2)	1106	(1.7)
	合計	64366	(100)	744	(100)	442	(100)	65552	(100)
$(\chi^2 = 682.409, df = 3, p = .000)$									

表63 「シンナー遊び」生涯経験率の推移 (%) (「無回答」を除いて計算したもの)

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1996	1.4	1.2	1.3	1.7	0.7	0.7	0.6	0.9	1.1	0.9	1.0	1.3	108	53,440
1998	1.7	1.2	1.6	2.3	0.9	0.9	0.8	1.1	1.3	1.1	1.2	1.7	148	71,299
2000	1.6	1.4	1.6	1.9	0.9	0.8	0.8	1.1	1.3	1.1	1.2	1.5	140	61,675
2002	1.4	1.3	1.4	1.5	1.0	1.0	1.1	1.0	1.2	1.2	1.3	1.3	149	62,413
2004	1.3	1.2	1.1	1.6	1.0	0.9	1.0	1.0	1.1	1.1	1.1	1.3	147	65,110

表64 「シンナー遊び」1年経験率の推移 (%) (「無回答」を除いて計算したもの)

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1996	0.8	0.6	0.8	1.0	0.4	0.4	0.4	0.6	0.6	0.5	0.6	0.8	108	52,229
1998	1.0	0.7	0.9	1.3	0.6	0.6	0.5	0.7	0.8	0.6	0.7	1.0	148	70,302
2000	1.0	0.8	0.9	1.1	0.6	0.5	0.5	0.7	0.8	0.6	0.7	0.9	140	60,280
2002	0.9	0.8	0.9	0.9	0.7	0.7	0.8	0.7	0.8	0.7	0.8	0.8	149	60,800
2004	0.9	0.8	0.8	1.0	0.7	0.7	0.7	0.7	0.8	0.7	0.8	0.9	147	65,299



調査⁵⁾¹²⁾¹⁴⁾と、1996年から2年に1回、厚生(労働)科学研究費補助金により、当分担研究者らにより継続調査されてきた全国調査¹⁰⁾¹³⁾²⁰⁾²¹⁾に限られている。

その結果、有機溶剤乱用の生涯経験率が明らかになり、有機溶剤乱用経験者群では非経験者群に比べて、日常生活の規則性が有意に乱れており、家族性が希薄(精神的単親家庭⁹⁾と称した)で、友人関係にも難があることが明らかになっている⁵⁾¹²⁾¹⁴⁾。

また、地域的には、有機溶剤の乱用は昼夜人口比と強い相関があり、夜間に人口が多く、昼間に人口の少ない地域ほど経験率が高いこと¹⁹⁾、及び、有機溶剤の乱用経験と喫煙経験・喫煙頻度とは強い相関があり⁹⁾、わが国の中学生では喫煙が有機溶剤乱用へのGateway Drug³⁾となっている可能性が高いことも指摘してきた²²⁾。

今回の調査研究は、上記一連の調査研究を継続的に発展させたものであり、わが国では薬物乱用

に関する第5回目の全国中学生調査である。

2. 「シンナー遊び」の広がりについて

今回の調査研究では、「シンナー遊び」の生涯経験率(無回答を除いたもの)は、男子では1.3%(1年生1.2%,2年生1.1%,3年生1.6%)、女子では1.0%(1年生0.9%,2年生1.0%,3年生1.0%)、全体では1.1%(1年生1.1%,2年生1.1%,3年生1.3%)であった。

表63、図1は生涯経験率の年次推移を示しているが、2002年調査との比較では、男子及び全体では減少してはいるものの、女子では横這いであった。しかし、男女ともに、1年生、2年生での生涯経験率が低下していたことは、望ましい傾向であると考えられる。

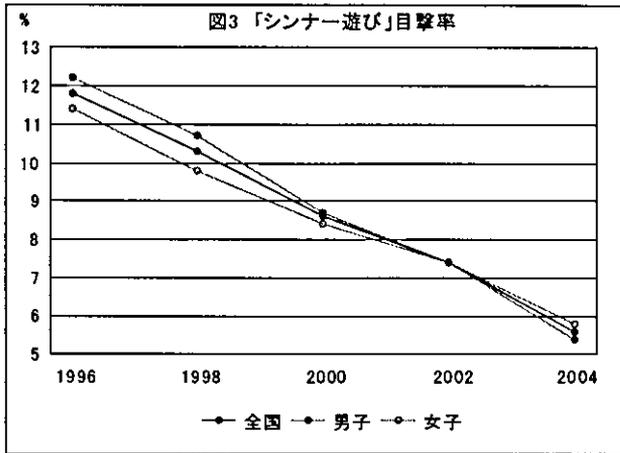
一方、1年経験率は、流行の勢いを探る意味では生涯経験率よりは優れているはずである。しかし、個人情報の秘密保持という意味でのバイアスは生涯経験率よりは高いと考えられる。そのためか、1996年調査~2002年調査では、すべて「経験あり」の人数よりは「無回答」の人数の方が多いという結果であった。しかし、今回は、「経験あり」が「無回答」を初めて上回る結果であった。ただし、バイアスの高さを想定して、従来通り、参考として、1年経験率の推移を載せた(表64、図2)。

図2及び表64に見るように、1年経験率は2002年調査とほぼ同じ結果であった。

ところで、この種の調査で最も問題になるのは、結果の信頼性であろう。この信頼性は、自記式調査と同時に、何らかの客観的検査(たとえば尿からの馬尿酸の測定)を実施することによって、初めて明らかになることである。しかしながら、尿検査の実施は、個人の人權上の問題にも関わる難しい方法であり、実施は事実上不可能である。したがって、当研究者らは、類似した方法論にもとづく継続的な調査の結果によるトレンドを見ることが、本調査研究の主目的であると考えている。

同時に「シンナー遊び」の広がり増減を判断するには、経験率だけではなく、いくつかの関連する指標の結果をも考慮して、総合的に判断する必要があると考えている。

そこで採用しているのが、「シンナー遊び」をこれまでに目撃したことのある者の率(生涯目撃



率：表65、図3)、身近に「シンナー遊び」をしている人を知っている者の率(乱用者周知率：表66、図4)、「シンナー遊び」に誘われたことのある者の率(生涯被誘惑率：表67、図5)である。それらを見ると、目撃率、乱用者周知率は確実に減少傾向にあり、有機溶剤乱用の「流行の勢い」が弱くなってきていることが強く示唆される。

ただし、生涯被誘惑率は、男子では減少傾向が見られるものの、女子でのそれには、その傾向が認められず、2002年調査では男女差がなくなり、今回の2004年調査では、男子より高い値となっている。誘惑に対する女子の対策が必要かも知れない。

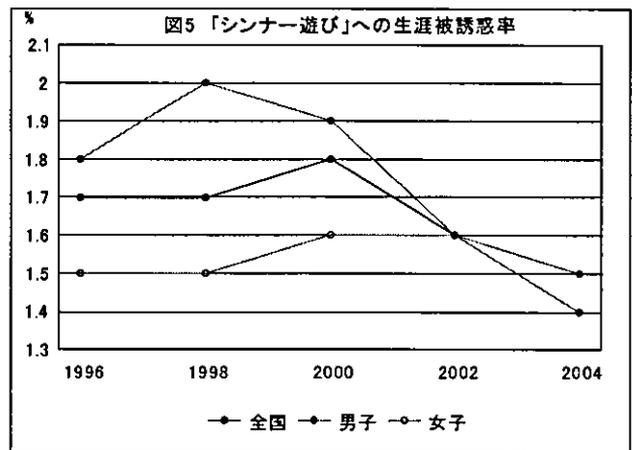
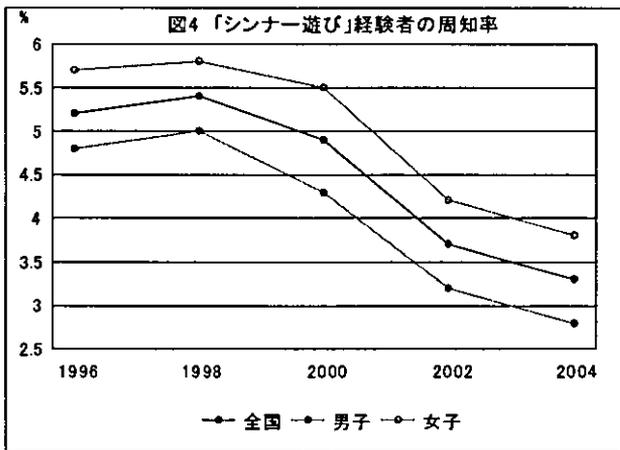


表65 「シンナー遊び」を実際に見たことがある者の率 (%) (「無回答」を除いて計算したもの)

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1996	12.2	9.9	12.6	14.1	11.4	9.2	12.0	13.1	11.8	9.5	12.3	13.6	108	53,863
1998	10.7	8.8	10.0	13.3	9.8	8.3	9.5	11.5	10.3	8.5	9.7	12.4	148	71,599
2000	8.7	7.5	8.3	10.2	8.4	7.0	7.9	10.2	8.6	7.2	8.1	10.2	140	61,905
2002	7.4	6.3	7.6	8.3	7.4	6.8	7.3	7.9	7.4	6.6	7.5	8.1	149	62,611
2004	5.4	4.9	4.6	6.6	5.8	4.9	6.1	6.4	5.6	4.9	5.3	6.5	147	65,296

表66 身近に「シンナー遊び」をしている人がいると答えた者の割合 (乱用者周知率) (%) (「無回答」を除いて掲載したもの)

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1996	4.8	3.6	4.6	6.4	5.7	3.9	6.2	6.9	5.2	3.7	5.4	6.6	108	53,697
1998	5.0	3.4	4.9	6.6	5.8	4.1	5.8	7.4	5.4	3.7	5.4	7.0	148	71,379
2000	4.3	2.9	4.5	5.5	5.5	4.0	5.1	7.4	4.9	3.4	4.8	6.5	140	61,773
2002	3.2	2.4	3.5	3.7	4.2	3.3	4.4	4.7	3.7	2.8	3.9	4.2	149	62,517
2004	2.8	2.3	2.7	3.3	3.8	2.9	3.5	4.9	3.3	2.6	3.1	4.1	147	65,124

ちなみに本調査の記載上の「正確さ」を見るため、有機溶剤未経験者における「シンナー遊び」についての気持ちに関し、回答の矛盾を表8に示した。それを見る限り、調査用紙への記載に関しては、本調査は極めて正確に実施されていると推定される。

以上を総合すると、「シンナー遊び」の「流行の勢い」は確実に弱くなって来ていると考えられる。

3. 「シンナー遊び」と日常生活・家庭生活・友人関係

「シンナー遊び」経験者群と非経験者群との比較では、「起床時間の規則性」(表20)、「就床時間の規則性」(表21)、「朝食の摂取率」(表22)から見た日常生活の規則性、及び「学校生活への思い」(表23)、「クラブ活動の参加状況」(表24)、「親しく遊べる友人の存在」(表30)、「相談事の出来る友人の存在」(表31)において、統計的有意差が認められており、「シンナー遊び」経験者群での日常生活の不規則さ、学校生活への不満、友人関係の希薄さが明かである。

これらの背景には、そもそもの家庭生活のあり方が大きく影響していると考えられるが、表25～27に見る家族との夕食頻度の差は、今回の調査でも「シンナー遊び」経験者群と非経験者群とで有意差を示していた。

ところで、「父親との夕食頻度(表27)」は、「家族全員での夕食頻度(表25)」よりも低率になっており、これは明らかに矛盾である。しかも、この矛盾は、これまでの同種の調査⁵⁾¹⁰⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾²¹⁾でも毎回認められており、中学生の考えの中には、「家族全員での夕食」と言った時、父親の存在は既に除外されている傾向がそれなりにあることを示唆

している。つまり、その背景には、父親はいつも帰りが遅いものだという中学生の考え方を伺うことができる。

そもそも、当研究者らは、夕食には「一家団欒」という意味合いがあると考えて調査項目に入れてきた。しかし、この夕食頻度には地域差が大きく、都市部ほど低く、農村部・山間部ほど高い傾向がある。「一家団欒」には、家族としての精神的意味合いも含まれるが、特に都市部における生活様式の多様性を考慮すると、親子の共有時間についての、もう少し直接的な項目が必要であると考えていた。そこで「学校、塾、習い事、運動での時間以外、大人が不在の状態で、毎日平均どの程度の時間を過ごしますか?」という項目も1998年より調べている(表28)。その結果、「シンナー遊び」経験者群では非経験者群に比べて、一日3時間以上大人不在で過ごす者が有意に多いことがわかった。結局、夕食頻度の少なさも、親子の共有時間の少なさの一現れとして解釈できる。

また、中学生という年代は、基本的に親との相談頻度は低いようであるが(表29)、それでも「シンナー遊び」経験者群での相談頻度は有意に低く(表29)、ここでも「シンナー遊び」経験者群における親子の共有時間の少なさが示唆された。

以上により、今回も、「シンナー遊び」経験者群は、総体的に見れば、家庭にも、学校にもなじめず、友人関係も希薄な中学生たちが多く、「居場所のない子供たち」⁵⁾¹⁶⁾¹⁸⁾が多いという推定が成り立つと考えている。

表11～表12は「シンナー遊び」をしている者について、どのような認識を持っているのかを調べたものである。表11～12では、経験者群と非経験者群での捉え方に、明らかな乖離が認められる。非経験者から見れば、経験者はほとんど「無関係」な人たち(95～96%)であり、経験者から見れば

表67 「シンナー遊び」に誘われたことのある者の率の推移 (有機溶剤乱用の生涯被誘惑率)(%)
(「無回答」を除いて計算したもの)

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1996	1.8	1.2	1.7	2.5	1.5	1.2	1.6	1.9	1.7	1.2	1.6	2.2	108	53,169
1998	2.0	1.0	1.9	2.9	1.5	0.9	1.5	2.0	1.7	0.9	1.7	2.5	148	67,776
2000	1.9	1.3	1.8	2.6	1.6	1.2	1.4	2.2	1.8	1.2	1.6	2.4	140	59,640
2002	1.6	1.1	1.7	1.9	1.6	1.3	1.7	1.9	1.6	1.2	1.7	1.9	149	59,988
2004	1.4	1.3	1.2	1.7	1.5	1.2	1.5	1.9	1.5	1.2	1.3	1.8	147	62,544

「気持ちができる気がする」人たちである割合が非常に高いということである。本研究者は、「シンナー遊び」経験者にとってわかる気がするという、その気持ちとは、受容感と帰属感を求める「居場所のない子供たち」⁵⁾¹⁶⁾の共通の思いであろうと推測している。

有機溶剤乱用者への治療的介入の際に、当研究者らは、親の参加なくして子の回復はないと考えており、親子の共有時間を増やすことの重要性を説いているが⁵⁾¹⁶⁾¹⁸⁾、今回の結果もその有力な根拠である。

しかも、経験論的には、本調査の結果を保護者に紹介することが、保護者の意識変革には重要なようである。

4. 「シンナー遊び」による医学的害

薬物乱用防止には、薬物乱用による諸害をきちんと認識させることが重要である。ところが、「知識」があれば乱用しないかという、そうとも言えない面がある。これまでの調査では、往々にして、害知識は有機溶剤乱用経験者群の方が高いという傾向が認められていた⁵⁾¹⁰⁾¹³⁾¹⁴⁾²⁰⁾²¹⁾。

しかし、2002年調査では、急性中毒死、歯の腐食、多発神経炎に関する男子、精神病に関する男女では、非経験者群の方で「知っている」を選んだ者が多く、それ以外の害知識でも、経験者群VS非経験者群で有意差が認められない項目が出てきた。今回の調査では、その傾向がさらに進み、急性中毒死、多発神経炎、精神病では、男女ともに非経験者群の方で「知っている」を選んだ者が多いと言った結果であった。

これは、「害を知らない者が乱用しやすい」という仮説（薬物乱用防止教育はこの仮説を根拠としているわけであるが）があるとすれば、期待される結果であり、ここ数年の薬物乱用防止教育推進による成果の可能性が高い。

しかし、図6は害知識周知率の年次推移を示している。ほとんどの害知識の周知率が増加傾向にあることは好ましい傾向であるが、急性中毒死に関しては上昇率が鈍く、そもそも精神病に関する周知率以外は、決して高い周知率とは言えない。薬物乱用防止教育の一層の推進が望まれる。

表68 有機溶剤乱用による害知識周知率の推移 (%)

(「無回答」をそのまま生かし、「知っている」と答えた者の割合)

急性中毒死			
	男性	女性	全体
1996	59.9	64.6	62.2
1998	65.3	70.1	67.6
2000	60.5	66.8	63.6
2002	61.2	65.8	63.4
2004	63.1	66.4	64.7

歯の腐食			
	男性	女性	全体
1996	55.4	52.2	53.8
1998	53.2	51.0	52.2
2000	55.8	55.8	55.8
2002	60.9	62.2	61.5
2004	68.9	69.4	69.2

多発神経炎			
	男性	女性	全体
1996	55.9	60.3	58.1
1998	60.4	65.9	63.0
2000	53.1	60.1	56.6
2002	56.2	62.1	59.1
2004	59.4	64.7	62.0

精神病			
	男性	女性	全体
1996	64.1	67.2	65.7
1998	72.5	75.8	74.1
2000	72.0	76.4	74.2
2002	75.3	80.3	77.7
2004	79.8	84.0	81.9

無動機症候群			
	男性	女性	全体
1996	37.6	46.4	41.9
1998	45.3	53.0	49.0
2000	42.3	48.6	45.4
2002	46.6	52.6	49.5
2004	53.3	57.8	55.5

フラッシュバック現象

1996	29.9	30.3	30.1
1998	47.5	46.3	46.9
2000	51.3	53.6	52.5
2002	53.3	57.1	55.1
2004	59.2	61.5	60.3

なお、薬物乱用防止教育には、「知識が行動に結びつくとは限らない」という大きな課題が常に存在するわけで、これに関しては、知識教育を行った上で、次の段階として、薬物依存からの回復の苦しみをドキュメンタリー形式で紹介したビデオ（平成9年度文部省制作「なくした自由」）の活用が期待される。

5.大麻・覚せい剤の乱用経験

そもそも、大麻及び覚せい剤の乱用経験率は、調査結果上、これまで同様に「経験あり」よりは「無回答」の方が数字が大きいため（表53、表57）、参考データとした方が妥当と思われるが、参考データは参考データなりに推移を見る必要がある。

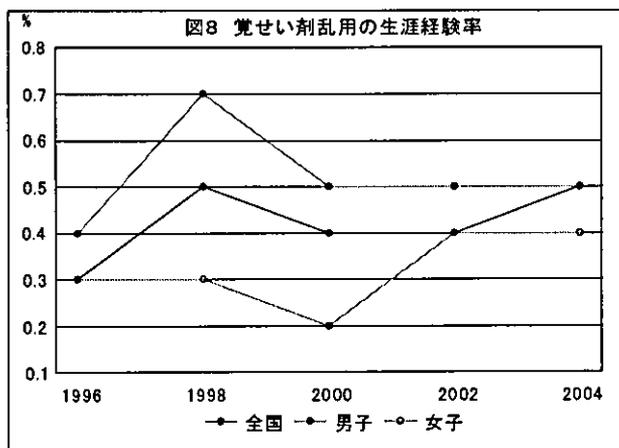
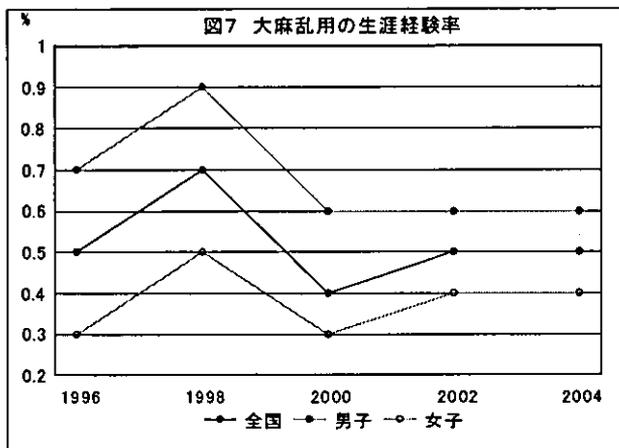
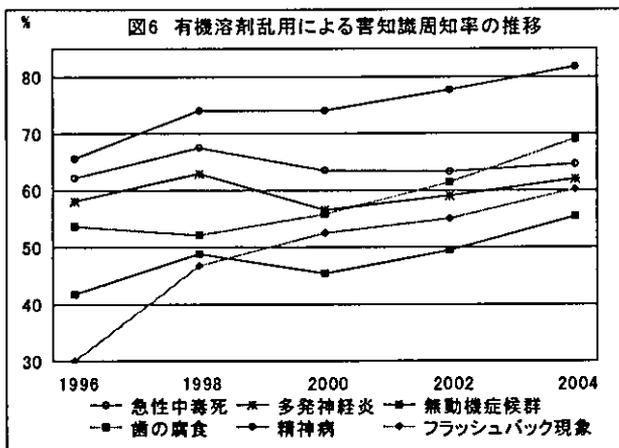
図7に見るように、男女全体での大麻の生涯経験率は、1998年調査に比べると、2000年調査では低下したものの、2002年調査からは平衡状態を示している。男女別では2002年調査との比較では、男女ともに変化がないが、2000年調査に比べて、2002年調査での女子における生涯経験率が全体を押し上げたことが読み取れる。

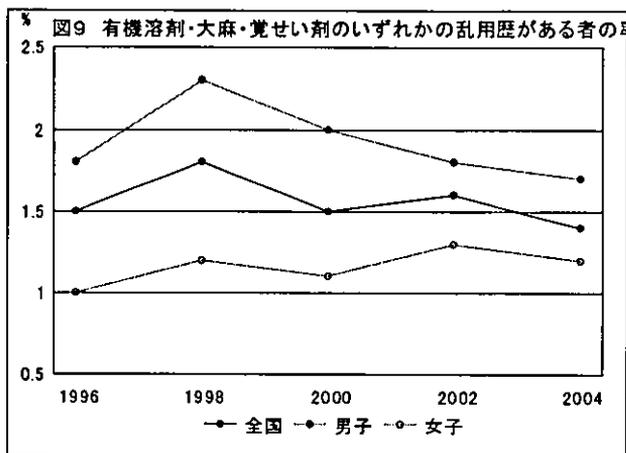
図8は覚せい剤の生涯経験率の推移を示している。男女全体での結果を見ると、大麻同様、1998年調査に比べると、2000年調査では低下したものの、2002年調査に比べると今期あの結果は再び増加を示している。結局これも、女子における増加傾向が全体を押し上げているようである。

第3次覚せい剤乱用期の特徴の一つは、若年層までへの乱用の拡大であるが、その中でも女子における薬物乱用の拡大には注意を払う必要がある。

以上のように大麻・覚せい剤についての生涯経験率はあくまで参考データであるため、利用法に限界はあるものの、今日の薬物乱用状況を考えるためには貴重なデータであると考えている。

なお、参考までに有機溶剤・大麻・覚せい剤のいずれかの生涯経験率と大麻・覚せい剤のいずれかの生涯経験率を表71（図9）、表72（図10）に示した。2002年調査との比較では、女子の大麻ないしは覚せい剤乱用の生涯経験率を除けば、減少傾向にある。





6. 大麻・覚せい剤乱用による医学的害

大麻、覚せい剤乱用による医学的害知識の周知度は、表56、表59の通りであるが、その推移を示したものが表73 (図11、12) である。

大麻による精神病・無動機症候群に関しては、1998年調査の女性を除けば、2000年調査までは、男女ともに有機溶剤乱用群の方が周知率が有意に

表73 大麻及び覚せい剤乱用による害知識周知率の推移 (%)

(「無回答」をそのまま生かし、「知っている」と答えた者の割合)

大麻乱用による精神病、無動機症候群

	男性	女性	全体
1996	48.3	45.4	46.9
1998	48.0	46.4	47.2
2000	45.8	45.8	45.8
2002	52.4	56.4	54.4
2004	59.1	62.5	60.8

覚せい剤乱用による精神病、フラッシュバック現象

	男性	女性	全体
1996	42.5	46.5	44.5
1998	53.9	57.9	55.8
2000	55.4	61.3	58.3
2002	58.0	65.6	61.7
2004	62.5	66.9	64.6

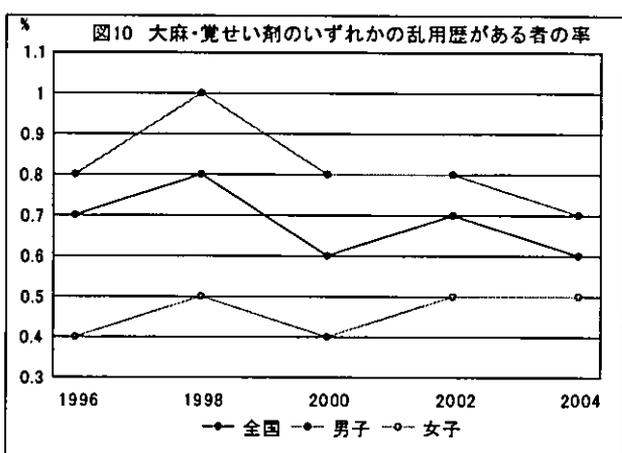
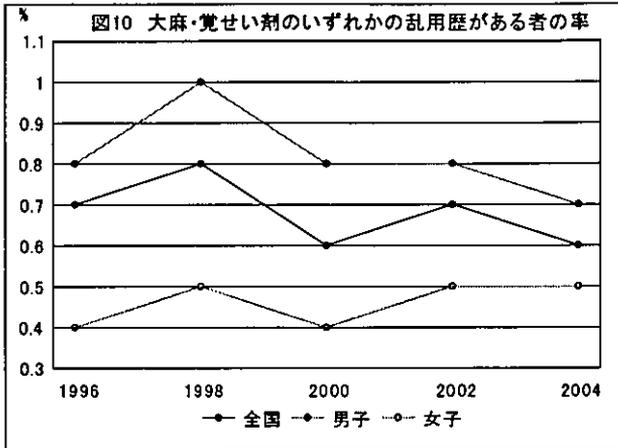


表69 大麻乱用の生涯経験率の推移 (%) (「無回答」を除いて計算したもの)

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1996	0.7	0.4	0.8	0.9	0.3	0.3	0.3	0.3	0.6	0.4	0.5	0.6	108	53,271
1998	0.9	0.8	0.8	1.0	0.5	0.5	0.4	0.5	0.7	0.6	0.6	0.8	148	70,846
2000	0.6	0.4	0.6	0.7	0.3	0.2	0.4	0.3	0.4	0.3	0.5	0.5	140	61,477
2002	0.6	0.4	0.8	0.7	0.4	0.3	0.6	0.4	0.5	0.4	0.7	0.5	149	62,255
2004	0.6	0.4	0.7	0.7	0.4	0.3	0.4	0.5	0.5	0.4	0.5	0.6	147	64,875

表70 覚せい剤乱用の生涯経験率の推移 (%) (「無回答」を除いて計算したもの)

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1996	0.4	0.3	0.4	0.5	0.3	0.3	0.2	0.3	0.4	0.3	0.3	0.4	108	53,197
1998	0.7	0.5	0.7	0.8	0.3	0.2	0.3	0.4	0.5	0.4	0.5	0.6	148	70,819
2000	0.5	0.5	0.5	0.6	0.2	0.2	0.3	0.3	0.4	0.3	0.4	0.4	140	61,457
2002	0.5	0.4	0.6	0.5	0.4	0.3	0.4	0.4	0.4	0.3	0.5	0.5	149	62,181
2004	0.5	0.4	0.6	0.7	0.4	0.3	0.4	0.4	0.5	0.3	0.5	0.6	147	64,886



高かった。しかし、2002年調査では、初めて有機溶剤乱用経験の有無による有意差がなくなり、今回の調査では、わずかではあるが、有機溶剤非経験者群の方が、「知っている」者の割合が高くなった（ただし有意差なし）。

また、覚せい剤乱用による精神病・フラッシュバック現象に関しては、男子では1996年調査、1998年調査では有機溶剤乱用群での周知率が有意に高かったが、2000年調査、2002年調査では、有意差こそないものの、有機溶剤乱用非経験者群の方がわずかに周知率が高いというように変化した。しかし、今回は、再び、有機溶剤経験者群の方が「知っている者」の割合は高いという結果にもどってしまった。

図11、図12に見るように、害知識の周知率自体は年々上昇してはいるが、上記の観点から、なお一層の薬物乱用防止教育の推進が必要であると考えられる。

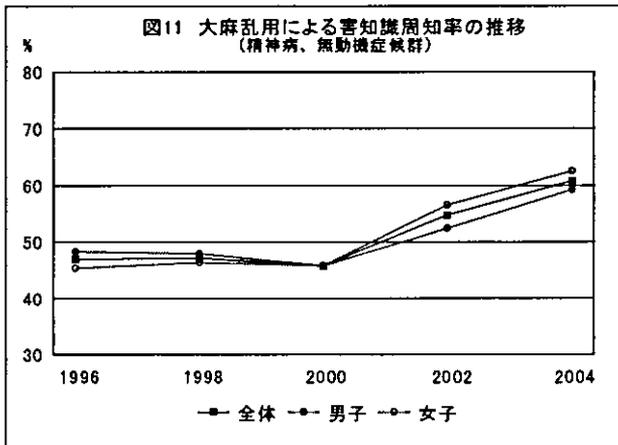
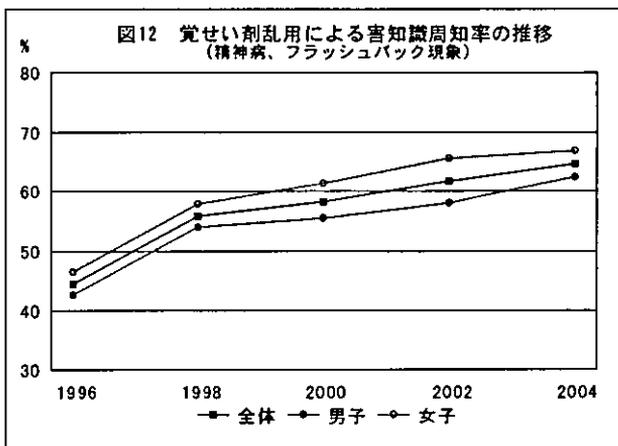


表74 違法薬物の入手可能性の比較
 (「簡単に手に入る」と「少々苦勞するが手に入る」を選択した者の合計)

	有機溶剤		
	男性	女性	全体
1998	41.6	34.4	38.1
2000	41.1	35.6	38.4
2002	38.5	36.4	37.4
2004	25.6	23.1	24.4



	大麻		
	男性	女性	全体
1998	23.2	21.1	22.2
2000	24.1	23.8	23.9
2002	25.1	26.2	25.7
2004	18.1	17.9	18.0

	覚せい剤		
	男性	女性	全体
1998	24.0	22.6	23.4
2000	24.4	25.5	24.9
2002	25.0	27.7	26.4
2004	17.9	18.6	18.3

7. 違法薬物の入手可能性の比較

1993年以来、一部の外国人を中心に、大麻および覚せい剤が、大都会では路上で密売されるようになり、第3次覚せい剤乱用期を作り出した⁹⁾。その影響と思われるが、1996年の1年間に覚せい剤取締法により検挙された高校生の数は対前年度比2.3倍と激増した⁹⁾。いくら有機溶剤乱用の勢いが鈍ったと言っても、この現実、わが国の薬物汚染状況の深刻化を象徴する以外の何物でもない。

表74は、本調査による違法薬物の入手可能性の比較である。

有機溶剤は日常生活上の必需品であり、その気になれば入手は極めて簡単である。しかし、表74の結果は入手可能を選んだ者が、予想外に少なく、今回の結果の低下には、少々驚きを隠せない(図13)。「シンナー遊び」のための「有機溶剤」という問いの言葉から、トルエンの入手を想定した者が多かった可能性もあるが、そもそも有機溶剤乱用に関する関心のなさの現れとも考えられる。

ただし、大麻、覚せい剤の入手可能性に比べれば、有機溶剤の入手可能性が最も高いことは、事実一致するところである。

大麻及び覚せい剤の入手可能性は、図13に見るように、今回の2004年調査では激減している。これは、この間の取締りの厳しさの反映の可能性はある。

ただし、この入手可能性を、有機溶剤乱用経験の有無を軸に見た場合(表61、表62)、大麻の入手可能性では、「簡単に手に入る」「少々苦勞するが、なんとか手に入る」を選んだ者の合計を入手可能群とすると、その割合は、「シンナー遊び」未経験者群では、男子で18%、女子で17%であるのに対して、経験者群では、男子で46%、女子で52%と明らかに異なっていた($p<0.01$) (表61)。

このことは覚せい剤の入手可能性についても同じであり。入手可能群の割合は、「シンナー遊び」未経験者群では、男子で17%、女子で18%であり、経験者群では、男性で45%、女性で54%となっていた($p<0.01$) (表62)。

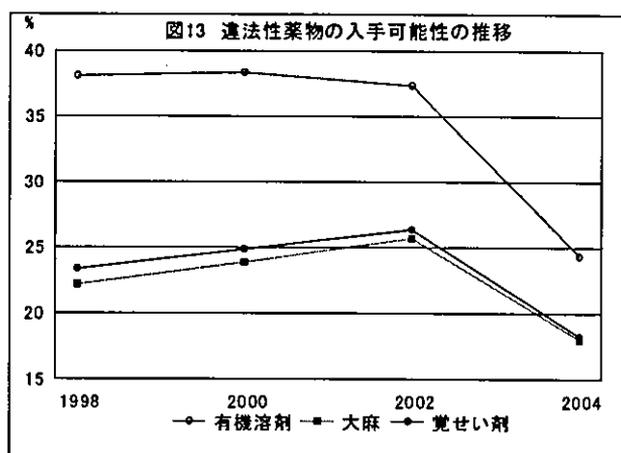


表71 有機溶剤・大麻・覚せい剤のいずれかの乱用の生涯経験率 (%)

(無回答を除いて計算したもの)

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1996	1.8	1.5	1.8	2.2	1.0	0.9	1.0	1.0	1.5	1.3	1.5	1.7	108	54,136
1998	2.3	1.8	2.1	2.9	1.2	1.2	1.1	1.3	1.8	1.5	1.6	2.2	148	71,245
2000	2.0	1.7	2.0	2.3	1.1	1.0	1.0	1.2	1.5	1.4	1.5	1.8	140	61,481
2002	1.8	1.7	1.9	1.9	1.3	1.2	1.4	1.3	1.6	1.5	1.7	1.6	149	61,668
2004	1.7	1.4	1.5	1.9	1.2	1.1	1.2	1.2	1.4	1.2	1.3	1.6	147	64,314

表72 大麻・覚せい剤のいずれかの乱用の生涯経験率 (%) (無回答を除いて計算したもの)

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1996	0.8	0.5	0.8	1.0	0.4	0.4	0.4	0.4	0.7	0.5	0.7	0.8	108	54,116
1998	1.0	0.9	1.0	1.2	0.5	0.5	0.5	0.6	0.8	0.7	0.8	0.9	148	71,245
2000	0.8	0.6	0.7	0.9	0.4	0.3	0.4	0.4	0.6	0.5	0.6	0.6	140	61,481
2002	0.8	0.6	0.9	0.8	0.5	0.4	0.6	0.6	0.7	0.5	0.8	0.7	149	61,668
2004	0.7	0.5	0.8	0.8	0.5	0.4	0.5	0.6	0.6	0.5	0.6	0.7	147	64,610

これらの結果は、わが国の中学生にとって、有機溶剤を乱用すると言うことは、大麻、覚せい剤が身近なものになるという特徴を示唆している。

8. 薬物乱用に対する法の遵守性

わが国の規制薬物乱用が、多くの国に比べて少ない背景には、国民の法に対する遵守性の高さがあるのではないかと本研究者は推定している。

喫煙については全体の10.8% (表34) の者が「少々ならかまわない」を選んでいるのに対して、「シンナー遊び」に関してそれを選んだ者は2.4% (表9) に過ぎず、大麻では1.4% (表55) であったことは、同じ依存性薬物と言えども、有機溶剤及び大麻乱用への心理的垣根は喫煙よりはるかに高いことを物語っている。(覚せい剤に関しては、尋ねていない)

しかも、表54と表58に示したように、「シンナー遊び」の経験と大麻・覚せい剤乱用の経験とは、強い結びつきがあり、わが国では依然として有機溶剤が大麻・覚せい剤への「ゲイトウェイ・ドラッグ」となっている可能性が強く示唆される³¹²⁾。

9. 「ゲイトウェイ・ドラッグ」としてのタバコとアルコール

中学生における喫煙及び飲酒が「シンナー遊び」への「ゲイトウェイ」になっている可能性が高いことは以前より指摘してきたが^{313) 314) 22)}、表50及び表52の結果は、大人が同伴しない飲酒と「シンナー遊び」との結びつきの強さと、喫煙経験と「シンナー遊び」との結びつきの強さを再確認させるものである。この背景には、有機溶剤乱用同様に、家庭環境、「仲間」関係等、薬物乱用の背後にある人間関係が大きな要因となっていると推定できる。

中学生における喫煙・飲酒・薬物乱用防止を行う際には、喫煙・飲酒・薬物乱用といった表面的行為に目を奪われすぎることなく、その背後に潜む家庭環境、「仲間」関係等の人間関係に目を注ぐことが重要であろう¹⁶⁾。

E. 結論

わが国の中学生における薬物乱用の広がり把握し、特に有機溶剤乱用に関する危険因子を特定することによって、中学生に対する薬物乱用防止対策の基礎資料に供するために、飲酒、喫煙、有機溶剤・大麻・覚せい剤乱用に対する意識・実態調査を実施した。調査期間は、2004年10月中(一部11~12月中)であり、層別一段集落抽出法により選ばれた全国212校の全生徒を対象に、自記式調査を実施した。その結果、147校(対象校の69.3%)より、65,611人(対象校212校の全生徒想定数の61.4%)の回答を得た。有効回答数は65,552人(対象校212校の全生徒想定数の61.3%)であった。

ただし、回答が得られなかった県が3県あり、都道府県毎の回答率には、未だにばらつきがあることをふまえた上で、本調査の結果を利用する必要がある。

このような限界はあるが、以下のような結論を得た。

① これまでに有機溶剤乱用を経験したことがあると回答した男子は1.3% (1年生1.2%、2年生1.1%、3年生1.6%)、女子では1.0% (1年生0.9%、2年生1.0%、3年生1.0%)、全体では1.1% (1年生1.1%、2年生1.1%、3年生1.3%)であった。

この結果は、男女合わせた全体では、1996年に開始した一連の本調査では、1996年調査とともに最低の値である。特に男子ではこれまでの最低の値となった。しかし、女子ではこれまでで最高であった2002年調査と同じ値であった。

男子では1998年以降減少しているのに対して、女子では1996年以来増加傾向にあり、女子での今後が危惧される結果であった。

② 有機溶剤乱用の目撃率に関しては男性、女性、全体の全てにおいて、1996年以降、着実に低下しており(全体で11.8%から5.6%)、「身近に経験者がいる」と答えた者の率も、1998年のピークから着実に減少していた(全体で5.4%から3.3%)。

また、有機溶剤乱用に「誘われた」ことのある者の率は、男子では1998年調査以降減少傾向にあり、今回の調査では1996年以降の最低を示したが、女子では1996年以降ほとんど横這いであり、女子における「誘い」が危惧される結果であった。

③ 以上を総合すると、男女合わせた全体では、有機溶剤乱用の勢いは、確実に弱くなってきていると考えられる。それは男子における各種指標に対する低値化によると考えられるが、逆に、女子における各値は増加ないしは横這い状態にあり、女子における有機溶剤乱用の今後が危惧される結果であった。

④ 有機溶剤乱用経験者群では、非経験者群に比べて、日常生活の規則性、学校生活、家庭生活、友人関係において、好ましくない傾向が統計学的有意差を持って強いことが再確認された。

⑤ その背景には、家庭生活のあり方が大きく影響していると考えられる。経験者群では、「親との相談頻度」「家族との夕食頻度」が有意に低く、逆に「大人不在での時間」が有意に長く、親子の共有時間が少ない傾向が伺われた。

⑥ 結局、有機溶剤経験者群は、相対的に見れば、家庭にも、学校にもなじめず、友人関係も希薄な中学生たちが多く、「居場所のない子供たち」と推測することができよう。

⑦ また、中学生における喫煙と大人が同伴しない飲酒は、有機溶剤乱用と強い繋がりを持っており、これらは、有機溶剤乱用への「ゲイトウェイ」となっている可能性が再確認された。

⑧ これまでの一連の本調査では、往々にして、害知識は有機溶剤乱用経験者群の方が高いという傾向が認められていた。しかし、今回の調査では、有機溶剤の乱用による害としての急性中毒死、多発神経炎、精神病に関しては、非経験者群の方で「知っている」を選んだ者が男女ともに多いという結果が初めて出た。これは、「害を知らない者が乱用しやすい」という仮説があるとすれば、「望むべき姿」である。

以上及び生涯経験率の低下を総合して、薬物乱用防止教育の成果が着実にできていると考えられる。

しかし、歯の腐食に関しては、2002年調査の男子で、「知っている」と答えた者が有機溶剤非乱用経験者群の方が多いという結果が初めて出たにも関わらず、今回の2004年調査では経験者群の方が多いという従来型に逆戻りしてしまったり、無動機症候群、フラッシュバック現象では、相変わらず従来型のままであったりし、なお一層の薬物乱用防止教育の推進が望まれるところである。

⑨ 大麻の生涯経験率は、男子で0.6%（1年生0.4

%、2年生0.7%、3年生0.7%）、女子で0.4%（1年生0.3%、2年生0.4%、3年生0.5%）、全体で0.5%（1年生0.4%、2年生0.5%、3年生0.6%）であり、覚せい剤の生涯経験率は、男子で0.5%（1年生0.4%、2年生0.6%、3年生0.7%）、女子で0.4%（1年生0.3%、2年生0.4%、3年生0.4%）、全体で0.5%（1年生0.3%、2年生0.5%、3年生0.6%）であった。

大麻に関しては男女を問わない全体では、1998年に記録した最高値（0.7%）よりは低いが、2002年調査の結果と同じであった。

覚せい剤に関しては、1998年に記録した最高値（0.5%）と同じ結果であり、2002年調査の結果よりは0.1%増加していた。

性別では、大麻でも覚せい剤でも生涯経験率は2002年調査とほぼ同じであった。

ただし、生涯経験者数は無回答者数よりも少なく、その意味では参考データの意味合いが否定できない。

⑩ 大麻及び覚せい剤乱用による医学的害知識の周知度は、増加傾向にあり歓迎されるが、そもそも周知度自体が高いとは言えず、薬物乱用防止教育の一層の推進が望まれる結果であった。

⑪ 違法性薬物の入手可能性については、有機溶剤は日常生活上の必需品であり、その入手可能性は大麻や覚せい剤よりは高かった。しかし、2004年調査では、その入手可能性はこれまでに激減していた。また、大麻、覚せい剤の入手可能性は1998年以降、着実に増加していたが、今回の2004年調査では、激減していた。

これらは、この間の取り締まりの強化による成果の可能性が高い。

ただし、有機溶剤乱用非経験者群では「絶対不可能」を選択した者が、大麻でも覚せい剤でも男女ともに66%であるのに対して、有機溶剤乱用経験者群では、大麻に関しては男子で46%、女子で52%の者が、また、覚せい剤に関しては男子で46%、女子で54%の者が入手可能を選択していた。

わが国の中学生にとって、有機溶剤を乱用すると言うことは、大麻、覚せい剤が身近なものになるという特徴を強く示唆する結果であった。さらに、覚せい剤の入手可能性は有機溶剤乱用経験群女子で最も高いという結果であった。女子に対する対策が望まれるところである。

⑫ 薬物の乱用経験率には、法の遵守性が大きく影響すると考えられる。喫煙については全体の10.

8%の者が「少々ならかまわない」を選んでいるのに対して、「シンナー遊び」に関してそれを選んだ者は2.4%に過ぎず、大麻では1.4%であったことは、同じ依存性薬物と言えども、有機溶剤及び大麻乱用への心理的垣根は喫煙よりはるかに高いことを物語っている。

⑬ また、有機溶剤乱用経験者群の25%の者に大麻乱用の経験があり、24%の者に覚せい剤乱用の経験があり、有機溶剤乱用と大麻・覚せい剤乱用との間には強い結びつきがあることが認められた。同時に、喫煙経験と有機溶剤乱用経験との間にも結びつきが認められた。このことは、わが国の中学生では、喫煙→有機溶剤乱用→大麻・覚せい剤乱用という流れがあることを強く示唆する結果であった。

F. 健康危険情報

本研究は依存性薬物の広がりについての研究であり、結果はすべて健康危険情報に該当する。

G. 研究発表

1. 著書 なし

2. 論文発表

- (1) 和田 清：有機溶剤吸引の入り口としての喫煙：1994年千葉県中学生調査より。学校保健研究 45：512-527, 2004.
- (2) Hirabayashi, N., Wada, K., Kimura, T. et al. Prevalence of Substance Abuse among Patients with Physical Diseases Seen in an Emergency Room in Japan. The American Journal on Addictions 13: 398-404, 2004.
- (3) 和田 清：医療モデルの違いとしての精神作用物質依存症治療。精神科治療学 19：1281-1287, 2004.
- (4) 和田 清：論説 喫煙、飲酒、薬物乱用の実態と教育における対応。中等教育資料 823：20-25, 2004
- (5) 和田 清：薬物乱用の実態と傾向について。厚生労働 59, 17-20, 2004.
- (6) 和田 清：連載 心の健康に関するお役立ち情報 最終回。各職種が情報を共有し効果的な薬物乱用防止策を！。公衆衛生情報 64：4

2-45, 2004.

3. 学会発表

- (1) 和田 清：分科会5-話題提供者-「中学生の飲酒と家族・仲間」。第26回日本アルコール関連問題学会。名古屋。2004.7.9.
- (2) 高橋伸彰、和田 清：飲酒経験からみた中学生における薬物乱用行為に対する認識の違い。第39回日本アルコール。薬物医学会。八王子。2004.9.9.

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

謝辞

本調査研究にご協力いただいた多くの学校関係者、生徒、ならびに、本調査の実施に関して御尽力をいただいた多くの方々に、心よりお礼を述べさせていただきます。

また、調査用紙回収後の膨大な資料整理に協力をしていただいた、東京ダルク、千葉ダルクの協力者に感謝いたします。

参考文献

- 1) 尾崎 茂、和田 清：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査。平成14年度厚生労働科学研究費補助金(医薬安全総合研究事業)研究報告書「薬物乱用・依存等の実態把握に関する研究及び社会経済的損失に関する研究」(主任研究者：和田 清)。pp.87-128. 2003.
- 2) 和田 清、福井 進：覚せい剤精神病の臨床症状--覚せい剤使用年数との関係--。アルコール研究と薬物依存 25:143-158,1990.
- 3) 和田 清：“Gateway Drug”概念について。日本アルコール・薬物医学会雑誌 34(2)：95-106, 1999.
- 4) Wada, K., Fukui, S.: Demographic and Social Characteristics of Solvent Abuse Patients in Japan. The American Journal on Addictions 3:165-176, 1994.
- 5) Wada, K., Fukui, S.: Prevalence of volatile solvent inhalation among junior

- high school students in Japan and background life style of users. *Addiction* 88: 89-100, 1993.
- 6) Wada, K, Price, RK, Fukui, S: Cigarette smoking and solvent use among Japanese adolescents. *Drug and Alcohol Dependence* 46: 137-145, 1997.
- 7) Wada, K, Price, RK, Fukui, S: Reflecting Adult Drinking Culture: Prevalence of Alcohol Use and Drinking Situations among Japanese Junior High School Students in Japan. *Journal of Studies on Alcohol* 59: 381-386, 1998.
- 8) 和田 清：中学生における飲酒－飲酒文化の反映－. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 34: 36-48, 1999.
- 9) 和田 清：薬物乱用の現状と歴史. *神経精神薬理* 19: 913-923, 1997.
- 10) 和田 清、勝野眞吾、尾崎米厚、中野良吾：中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒についての調査研究. 平成8年度厚生科学研究費補助金（麻薬等対策総合研究事業）研究報告書「薬物依存・中毒者の疫学調査及び精神医療サービスに関する研究班」（主任研究者：寺元 弘）第1分冊薬物乱用・依存の多面的疫学調査研究（2）. pp. 21-60. 1997.
- 11) 文部省大臣官房調査統計企画課：全国学校総覧2004年版. 原書房. 東京. 2004.
- 12) Wada, K.: Prevalence of Solvent Inhalation among Junior High School Students in Japan and Their Background Lifestyle: Result of Chiba Prefecture Survey 1994. *Japanese Journal of Alcohol Studies and Drug Dependence* 37: 41-56, 2002.
- 13) 和田 清、中野良吾、尾崎米厚、勝野眞吾：薬物乱用に関する全国中学生意識・実態調査. 平成10年度厚生科学研究費補助金（医薬安全総合研究事業）研究報告書「薬物乱用・依存等の疫学的研究及び中毒性精神障害者等に対する適切な医療のあり方についての研究」（主任研究者：和田 清）. pp. 19-83. 1999.
- 14) 和田 清：中学生における有機溶剤乱用の実態とその生活背景－1992年千葉県調査より－. *学校保健研究* 43: 26-38, 2001.
- 15) 和田 清：中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒についての調査研究. 平成5年度厚生科学研究費補助金「麻薬等総合対策研究事業」薬物依存の社会的、精神医学的特徴に関する研究（主任研究者：福井 進）平成5年度研究成果報告書. pp. 27-54. 1994.
- 16) 和田 清：有機溶剤乱用発生の社会的背景－青少年にとり有機溶剤とは何か－. *アルコール医療研究* 8: 179-184, 1991.
- 17) 和田 清：中学生における飲酒－飲酒文化の反映－. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 34: 36-48, 1999.
- 18) 和田 清：有機溶剤乱用と家族. *精神保健研究* 7: 13-17, 1994.
- 19) Wada, K.: Lifetime Prevalence of Alcohol Drinking, Cigarette Smoking, and Solvent Inhalation among Junior High School Students in Japan: Tradition and Urbanization. *Japanese Journal of Alcohol Studies and Drug Dependence* 36: 124-141, 2001.
- 20) 和田 清、菊池安希子、尾崎米厚、勝野眞吾：薬物乱用に関する全国中学生意識・実態調査. 平成12年度厚生科学研究費補助金（医薬安全総合研究事業）研究報告書「薬物乱用・依存等の疫学的研究及び中毒性精神障害者等に対する適切な医療のあり方についての研究」（主任研究者：和田 清）. pp. 15-76. 2001.
- 21) 和田 清、畢 穎、尾崎米厚、勝野眞吾：薬物乱用に関する全国中学生意識・実態調査（2002年）. 平成14年度厚生労働科学研究費補助金（医薬安全総合研究事業）研究報告書「薬物乱用・依存等の実態把握に関する研究及び社会経済的損失に関する研究」（主任研究者：和田 清）. pp. 19-86. 2003.
- 22) 和田 清：有機溶剤吸引の入り口としての喫煙：1994年千葉県中学生調査より. *学校保健研究* 45: 512-527, 2004.

分担研究者らによる一連の中学生調査に関する報告書、論文一覧

		報告書	論文
1990年	千葉県12校	福井 進、和田 清、伊豫雅臣：薬物乱用・依存の実態と動向に関する研究－中学生における「シンナー遊び」の実態とその背景－。（班長）佐藤光源。厚生省「精神・神経疾患研究委託費」2指-13。薬物依存の発生機序と臨床及び治療に関する研究。平成2年度研究成果報告書。pp.27-34, 1991.	Wada,K., Fukui, S.: Prevalence of volatile solvent inhalation among junior high school students in Japan and backgroundlife style of users. Addiction 88: 89-100, 1993. Wada,K., Fukui, S.: Prevalence of tobacco smoking among junior high school students in Japan and backgroundlife style of users. Addiction 89: 331-343, 1994. Wada, K., Price, RK, Fukui, S: Cigarette smoking and solvent use among Japanese adolescents. Drug and Alcohol Dependence 46:137-145, 1997. Wada, K., Price, RK, Fukui, S: Reflecting Adult Drinking Culture: Prevalence of AlcoholUse and Drinking Situations among Japanese Junior High School Students in Japan. Journal of Studies on Alcohol 59: 381-386, 1998. 和田 清：中学生における飲酒－飲酒文化の反映－。日本アルコール・薬物医学会雑誌 34： 36-48, 1999.
1992年	千葉県14校	和田 清：中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒についての調査研究。平成4年度厚生科学研究（麻薬等対策総合研究事業）薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究（主任研究者：福井 進）平成4年度研究成果報告書。pp25-64, 1993. 3.	Wada, K,: Lifetime Prevalence of Alcohol Drinking, Cigarette Smoking, and Solvent Inhalation among Junior High School Students in Japan: Tradition and Urbanization. Japanese Journal of Alcohol Studies and Drug Dependence 36: 124-141, 2001. 和田 清：中学生における有機溶剤乱用の実態とその生活背景－1992年千葉県調査より－。学校保健研究 43 :26-38, 2001.
1993年	関東地方14校	和田 清：中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒についての調査	Kikuchi, A., Wada, K.: Factors Associated with Volatile Solvent Use

		研究. 平成5年度厚生科学研究(麻薬等対策総合研究事業)薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究(主任研究者:福井 進)平成5年度研究成果報告書. pp27-54, 1994. 3.	among Junior High School Students in Kanto, Japan. Addiction 98: 771-784, 2003.
1994年	千葉県15校 中国地方U市 12校	和田 清:中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒についての調査研究. 平成6年度厚生科学研究(麻薬等対策総合研究事業)薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究(主任研究者:福井 進)平成6年度研究成果報告書. pp35-60, 1995. 3.	Wada, K.: Prevalence of Solvent Inhalation among Junior High School Students in Japan and Their Background Lifestyle: Result of Chiba Prefecture Survey 1994. Japanese Journal of Alcohol Studies and Drug Dependence 37: 41-56, 2002. 和田 清:有機溶剤吸引の入り口としての喫煙:1994年千葉県中学生調査より. 学校保健研究45:512-527, 2004.
1996年	全国108校	和田 清、勝野眞吾、尾崎米厚、中野良吾:中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒についての調査研究. 平成8年度厚生科学研究費補助金(麻薬等対策総合研究事業)研究報告書「薬物依存・中毒者の疫学調査及び精神医療サービスに関する研究班」(主任研究者:寺元 弘)第1分冊薬物乱用・依存の多面的疫学調査研究(2). pp.21-60. 1997.	
1998年	全国148校	和田 清、中野良吾、尾崎米厚、勝野眞吾:薬物乱用に関する全国中学生意識・実態調査. 平成10年度厚生科学研究費補助金(医薬安全総合研究事業)研究報告書「薬物乱用・依存等の疫学的研究及び中毒性精神障害者等に対する適切な医療のあり方についての研究」(主任研究者:和田 清). pp.19-83. 1999.	
2000年	全国140校	和田 清、菊池安希子、尾崎米厚、勝野眞吾:薬物乱用に関する全国中学生意識・実態調査. 平成12年度厚生科学研究費補助金(医薬安全総合研究事業)研究報告書「薬物乱用・依存等の疫学的研究及び中毒性精神障害者等に対する適切な医療のあり方についての研究」(主任研究者:和田	

		清). pp.15-76. 2001.	
2002年	全国149校	和田 清、畢 穎、尾崎米厚、勝野眞吾：薬物乱用に関する全国中学生意識・実態調査(2002年). 平成14年度厚生労働科学研究費補助金(医薬安全総合研究事業) 研究報告書「薬物乱用・依存等の実態把握に関する研究及び社会経済的損失に関する研究」(主任研究者：和田 清). pp.19-86. 2003.	
2004年	全国147校	今回の報告書	

飲酒・喫煙・薬物乱用についての意識・実態調査

(第7版-04)

飲酒・喫煙・薬物乱用は、心と体の両面にさまざまな害を及ぼします。

この調査は、中学生が飲酒・喫煙・薬物乱用をどのように考えており、また、実際にどのくらいの人が飲酒・喫煙・薬物乱用を経験しているのかを調べ、今後の対策の参考にするものです。

答えにくい質問には答えなくても結構ですが、この調査では、回答者が誰かわからないように以下のような配慮がなされています。

- ・この調査用紙には、氏名など個人を見つけ出せそうなものを書くところはありません。
- ・先生には、必要に応じて、生徒の質問に答えていただきますが、必要以上に生徒の所には行かず、生徒が書きやすいように努めていただきます。
- ・書き終わったら、配られた封筒に用紙を入れて必ず封をし、先生の持っている大きな袋に封筒ごと入れてください。
- ・調査用紙は、封を切られることなく（学校の先生などに結果を知られることなく）、下記の研究室に運ばれ、研究室で開封し、厳重に保管され、研究以外の目的には使用しません。
- ・調査結果は、全体でまとめて処理します。個人が特定されることはありません。

各質問に対する回答は、ことわりがない限り、自分の場合に最も近いものの数字を一つだけ、丸で囲んでください。

実施機関：国立精神・神経センター 精神保健研究所 薬物依存研究部 千葉県市川市国府台1-7-3 TEL.047-372-0141

- (質問1) あなたは男性ですか、女性ですか？ 1. 男性 2. 女性
- (質問2) あなたは中学何年生ですか？ 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生
- (質問3) あなたの起床時間は、ほぼ一定していますか？ 1. はい 2. いいえ
- (質問4) あなたの就寝時間は、ほぼ一定していますか？ 1. はい 2. いいえ
- (質問5) あなたは、毎朝、朝食を食べていますか？ 1. ほとんど毎日食べている
2. 時々食べる
3. ほとんど食べない
- (質問6) あなたにとって、学校生活は次のどれですか？ 1. とても楽しい。
2. どちらかといえば楽しい
3. あまり楽しくない
4. まったく楽しくない
- (質問7) あなたはクラブ活動（部活）に参加していますか？ 1. 積極的に参加している
2. 消極的に参加している
3. 参加していない
- (質問8) あなたは、母親と週何回くらい夕食を食べますか？ 1. ほとんど毎日 2. 5～6回 3. 4回前後 4. 3回前後 5. 2回前後
6. ほとんど食べない 7. 母親がいない (単身赴任、死別、別居、離婚など)